



魅せられた男たち。

大塚の棒踊り

人吉市東大塚町

鹿末 定さん (78歳)

知重さん (52歳)

修一さん (26歳)



定さん
十月の九日、十日。急流球磨川と相良七百年の歴史で知られる温泉郷人吉は、にわかには活気を帯びる。創立千年を越す青井阿蘇神社の例祭である。
この祭りで奉納される郷土芸能のひとつに、県指定無形民俗文化財の棒踊りがある。

のとして評価が高い。その踊り手を、三代にわたって努める人たちがいる。人吉市中心から十五キロ程離れた山合いの小さな村東大塚に住む鹿末さん親子である。東大塚は、全戸数が五十戸。明治三十年頃に伝えられて以来、この棒踊りは、そのわずかな村人たちの手で守り継がれてきた。
踊り手は、六人一組、全体で十二名。それぞれが違った動きをしながら、木刀や薙刀、鎌などを互いに打ち合いながら踊る。テンポが早く、慣れないうちは、練習中にけがをすることも珍らしくないという。
最も大切なのは、全体の呼吸。踊りの早さも、その時々で雰囲気を変えてくる。「気付けに焼酎を飲つてると、また違いますしね」とキヤリア二十余年の知重さん。踊りに合わせ

エイエイ、カチン！地の底から響くような男たちの太く低いかけ声。木刀や木鎌がぶつかり合う激しい音。鹿児島を発祥の地とし、九州各地に残る棒踊りのなかでも、ここ人吉・大塚の棒踊りは、ひとときわ勇壮で優れたも

る歌も、練習、本番と、その度ごとに生で歌われる。いつてみれば、毎回、毎日が二度と再現できないパフォーマンスというわけだ。
踊りの形は、定さんの頃からほとんど変っていない。一つのポジションで四つの踊り。どんなに早い人でも覚えるのに、一カ月以上はかかる。もちろん、一通り覚えても、それで終りではない。「昔とはシナが違ふ」という定さん。踊りの細部や見せ場が昔ほどピタッとときまわっていないということらしい。
「難しいからこそ、おもしろいですよね。今度こそは、今度こそはつて、毎回満足ということがない」と始めて三年目の修一さん。「この踊りは、長男が継ぐことになっていて



私も最初はそれだけで始めたんですが、やってみるとうちに、だんだん踊りそのものに惚れるようになるんです。小さな集落の男たちに、こんなに根強く受け継がれてきた秘密は、この辺にあるようだ。
観衆の喝采に、充実感をかみしめるという知重さん。呼吸が合い、カチンという音がひとつの塊として聞える時、最高にうれしいという修一さん。そして、若者たちの踊りを、じっと見守る定さん。
男たちを夢中にさせ、見る者を熱くするこの大塚の棒踊り。「一人でも多くの人に見てもらいたい」という鹿末さん親子の願いどおり、もともと知られていい、もともと誇りにしたい、大切な郷土芸能のひとつだと思ふ。



修一さん



知重さん



熊本県指定重要無形民俗文化財

熊本県人吉市
大塚棒踊り